

# 郷土資料の 散歩道

図書館 郷土資料室  
☎21-6111内線6201

## 米陽八景

元禄時代に描かれた  
米沢の八景

新春の今月は米沢の名勝八カ所を描いた「米陽八景」を紹介いたします。市立米沢図書館所蔵の「上松家寄贈文書」の中の一巻で、中国の瀟湘八景や日本の近江八景・金沢八景（横浜市）にならい、米沢の名勝八景の絵に詩歌を添えたものです。

元禄八年（一六九五）、当時江戸に登っていた藩士たちが故郷米沢を懐かしみ、八景の絵を送ってもらい、漢詩と和歌を添えて一巻としたものです。絵を描いた米沢の絵師、漢詩を詠んだ

「秋涛子」、和歌を添えた「箕山文士」なる人物は不詳ですが、序文は「謙信公御年譜」を編集した儒医矢尾板三印が著しています。

### 春の白子と冬の遠山

図1は「白子晚鐘」と題し、松や檜に囲まれた白子神社一带を描いています。当時の米沢では白子の鐘が有名でした。明治維新の神仏分離で現在の白子神社には鐘楼はありませんが、江戸



▲白子晚鐘（図1）

時代には境内に別当寺があり、夕方には鐘が撞かれました。和歌は、

色 変 小高 社  
いろかえぬ松もこたかき御やしろは

響 異 鐘  
ひ、きことなる入相のかね

桜花咲く春の景色となつています。

冬の風景としては「遠山暮雪」（図2）があります。愛宕・羽山の二峰と、その麓の遠山集落が描かれています。民家には仄かな灯りと煙が見え、穏やかな冬の夕暮れの情景です。和歌は、

降 里 山 里  
ふりうつむ雪のゆうべのやまことは

立 煙 標  
たてるけふりやしるべなるらん

### 八景の画題と米陽八景

八景は中国湖南省の洞庭湖の附近、瀟江と湘江の合流した地域（瀟湘）を山水画に描いたのが始まりです。その文化が日本に伝えられ、近江八景をはじめ日本各地で八景ができました。

その画題は瀟湘八景にならない、夜雨・晚鐘・帰帆・晴嵐・秋月・落雁・夕照・暮雪の八景とするのが普通です。

米陽八景では最初が「白子晚鐘」で、次に川に降り立つ雁の群を描く「落石落雁」、夕焼けに映える成島八幡を描く「成島夕照」が続きます。次の「船坂帰樵」は、薪を馬に積み船坂峠を



▲遠山暮雪（図2）

下る樵を描きます。大きな湖や海に面していない米沢では「帰帆」の場所を選べず、その代わりに船坂の船と帰る樵にかけた洒落た比喻となっています。

五番目が「遠山暮雪」で、次は堂森山にかかる秋月に照らされた善光寺を描く「堂森秋月」、青葉繁る「館山晴嵐」と続き、最後は夜雨に煙る毘沙門堂を描く「宮井夜雨」で終わります。

四季（春の白子、夏の館山、秋の堂森、冬の遠山）および、城下（白子神社）と近郊の名所名跡をバランスよく配し八景を構成しています。

江戸に赴任した藩士の郷愁の心を慰めた「米陽八景」は、現在は約三〇〇年前の米沢の風景をほうふつとさせる貴重な資料となっています。